

なんでやねん

発行責任者 吉岡 忠

No. 1 2

関東大震災がおきる

史上最大の被害を出した震災

1923（大正12）年9月1日正午2分前に発生した関東大地震はマグニチュード7.9と推定される。

近代化した首都圏を襲った唯一の巨大地震であり、南関東から東海地域に及ぶ広い地域に被害が出た。

死者は105,385人、全潰したり、全焼、流出した家屋が293,387戸に上った。電気、水道、道路、鉄道等のライフラインにも大きな被害が出た。

地震により米国流や煉瓦造りのビルが倒壊したのに対して、日本流の耐震設計の

ビルが被害軽微であったことを契機として、地震の翌年の1924（大正13）年に市街地建築物法の構造強度規定が改正され、世界で初めての法令による地震力規定が誕生した（ここまで、内閣府のホームページ・防災情報ページ <http://www.bousai.go.jp> 「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書」より要約して引用した）。



上の写真は、俗称「浅草十二階」である（浅雲閣が正式名称）。東京・浅草公園に1890年に建てられたレンガ造りの建物で浅草名物の一つであった。左の写真が震災前のもので、右の写真が震災後のものである。

（資料出所：家永三郎編『日本の歴史6』ほるぷ出版 1984年 p. 116）



↑ 大火の黒煙でつまれた中央気象台の時計は、11時58分とまっています。

(資料出所：家永三郎編『日本の歴史6』ほろぶ出版 1984年 p. 119)

地震が起きた時間^{たい}帯は、昼ごはんのしたくどきであったので、火を使っている家庭が多く、今よりずっと^{もくぞう}木造家屋の多かった東京市と横浜市には、大火災がおきた。燃えさかる東京の大火災は、夜になっても、しずまらなかった。9月1日午後11時半ごろ、長野県と群馬県^{さかい}の境にある碓氷峠^{うすいとうげ}にいた人々は、天にのぼる火柱^{ひばしら}を見ることができた。軽井沢^{かるいざわ}から見た東京の空は、ちょうど「真夜中の夕焼け^{まよなか}」だったと言う。

朝鮮人と社会主義者の大虐殺

9月2日ごろから、東京市を中心に、朝鮮人が暴動^{ぼうどう}をおこすらしいといううわさが流れはじめた。また、朝鮮人が井戸^{いど}に毒を入れて歩いているといううわさや、サイダービン・ビールビンに石油をつめて放火しているといううわさも流れた。実際に、朝鮮人がそんなことをしているかどうか確かめることもしないで、軍隊・警察は、朝鮮人の検挙^{けんきょ}をはじめ、小銃^{しょうじゅう}・銃剣^{じゅうけん}などで虐殺^{ぎやくさつ}をはじめた。渋谷の近くでは、水道工事から帰る途中^{とちゅう}の100人あまりの朝鮮人が、天皇をまもる軍隊である近衛師団^{このえしだん}の部隊におそわれ、その大部分が射殺されたといわれる。

また、在郷軍人団^{ざいきょうじんだん}(もと軍人の会)・青年団・町内会のメンバーたちがつくった自警団^{けいだん}も日本刀や竹槍^{たけやり}や小銃で虐殺をつづけた。このとき、虐殺された朝鮮人の総数は、^{けいひん}京浜地方を中心になくとも約6,000人とみられている。

しかし、虐殺されたのは朝鮮人だけではなく、^{かうびざんれい}戒厳令によって、政治の責任をまかされた軍隊は、9月4日夜、江東地区の亀戸警察署にとらえられていた南葛労働会の指導者・河合義虎^{かわいよしとら}をはじめ、14人もの社会主義者を、近くの広場に連れだし、銃剣で突き殺し、石油をかけて焼いた。やはり、近衛師団^{きへいたい}の騎兵隊^{ひんこう}の犯行であった。また、東京憲兵隊^{けんべいたい}(軍隊の警察)の陸軍大尉甘粕正彦^{りくぐんたいいみまかずまさひこ}は、それまでさがしていた無政府主義者^{むせいふしゆぎしや}大杉栄^{おおいすぎさか}とその妻伊藤野枝^{いとうのえ}を検挙^{けんきょ}し殺した。いっしょにつかまった大杉栄の7歳の甥^{ふるいど}も殺された。3人の死体は、古井戸に投げこまれた。

(説明文は、家永三郎編『日本の歴史6』ほろぶ出版 1984年p. 118～p. 122を参考にした)